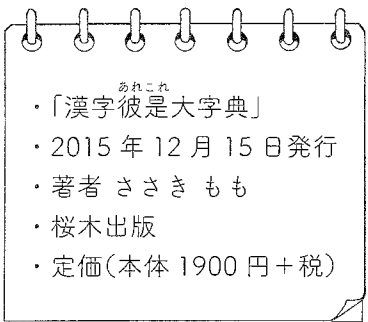


1

【メモ】



中学生の真一さんは、図書館で見つけた本を購入したいと思いい、その本の情報を書き取った【メモ】を見ながら書店に電話をかけている。【メモ】と【真一さんと店員の会話の一部】を読んで、①～③に答えなさい。

【真一さんと店員の会話の一部】

真一 本の注文をしたいのですが。
 店員 ありがとうございます。では書名を教えてください。
 真一 **【a】**
 店員 書名の表記を教えてください。
 真一 **【a】**すべて漢字です。
 店員 「あれこれ」もでしょうか。
 真一 **【b】**
 店員 「あれこれ」は漢字でどう書きますか。
 真一 **【c】**
 店員 なるほど。わかりました。
 真一 「彼是」には、ひらがなでふりがながふつてあります。
 店員 そうなんです。あと、「じてん」はどの漢字の「じてん」でしょうか。
 真一 **【d】**

2

①～④に答えなさい。

大納言殿のまありたまへるなりけり。御直衣、指貫の紫の色、雪に映えていみじうをかし。柱基にゐたまひて、「昨日今日、物忌にはべりつれど、雪のいたく降りれば、おぼつかなきになむ」と申したまふ。
 「道もなし」と思ひつるに、いかで」とぞ御いらへある。うち笑ひたまひて、「あはれ」ともや、御覧するどて」などのたまふ御有様ども、「これより、何事かはまさらむ。物語に、いみじう口にまかせていひたるに、たがはざめり」とおぼゆ。

あらわれたのは、定子の兄君、権大納言藤原伊周であった。御年二十歳。貴族の普段着である直衣と指貫の紫色が真っ白な雪に映えて、なんとも言えないすばらしさ。大納言は柱のもとにおすわりになって、宮さまにおっしゃる。

「昨日今日、私は物忌（外出や接客をつつしんで家にこもる日）でございましたが、雪がずいぶん降りましたので、宮のことが心配で……」「道もなし」と思っていました。よくまあいらつしやいましたこと」

「感心な者よ」と、ごらんくださるかと思ひましてね」この会話、このご様子。「これ以上すばらしいことがあるかしら。物語の中で口からでまかせに飾り立てて書かれている主人公たちとそっくりだわ」と、清女は思う。

この場面のお二人の会話は、じつは教養がある。「拾遺集」冬部の平兼盛の歌。

山里は雪降り積みて道もなし 今日来む人をあはれとは見む
 山里は雪に埋もれて道もないのに、わざわざ、今日訪ねてくれた人の心をしみじみうれいと思う、という意味。歌の上句の「道もなし」を宮は取り、下句の「あはれ」を伊周は取り、割りぜりふのように、めぐりに呼応させてみせたのである。

店員 わかりました。では出版社と著者を教えてください。
 真一 出版社は「桜木出版」です。著者は「ささきもも」で、**【x】**です。
 店員 わかりました。一冊よろしいでしょうか。
 真一 はい、一冊です。本が届いたら連絡してもらえますか。
 店員 かしこまりました。ではお名前と連絡先を教えてください。

①【真一さんと店員の会話の一部】の**【a】**～**【d】**には、次の(1)～(4)の内容が入る。それぞれに入る内容の組み合わせとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- (1) 「あれこれ」も漢字で書くこと。
 (2) 「文字」の「字」ではじまる字典であること。
 (3) 「かんじあれこれだいじてん」であること。
 (4) 一文字目は「彼」、二文字目は「是非」の「是」という字であること。

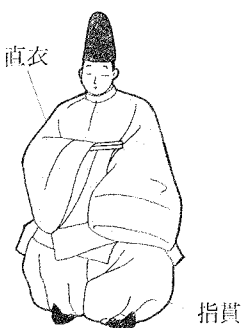
ア	【a】	—	【b】	—	【c】	—	【d】
イ	【a】	—	【b】	—	【c】	—	【d】
ウ	【a】	—	【b】	—	【c】	—	【d】
エ	【a】	—	【b】	—	【c】	—	【d】

② **【x】**について、真一さんは**——**の部分での店員とのやり取りを踏まえて、著者名について説明を加えた。**【x】**に入れるのに適当なことを、十字以内で書きなさい。

③ **~~~~**の部分、適当な謙譲語を使って書き改めなさい。

清女は息をのむ思いだったろう。二つ違いの兄と妹。いずれ劣らぬ美男美女。情愛深い顔を見合わせ、さりげなく極上の知的会話を愉しむ。その中宮のご風情ときたら。

(注) 中宮——天皇の后。
 権大納言——官職の一つ。
 宮さま、宮——いずれも中宮定子。
 清女——清少納言。



① 「**【あたまひて】**」の現代語訳に当たる部分を、解説文から抜き出して書きなさい。

② 「道もない」とあるが、「道もない」状況になったのはなぜか。それがわかる部分を、『枕草子』の原文から十五字以内で抜き出して書きなさい。

③ 「極上の知的会話」とあるが、これについて説明した次の文の漢字二字で抜き出して書きなさい。

ここで言う「極上の知的会話」とは、妹の中宮定子がその場の状況に合う和歌の**【x】**を引用したことに対して、兄の藤原伊周が同じ和歌の**【y】**を引用して呼応させるという、二人の**【z】**に基づいて成り立つ会話のことである。

④ 『枕草子』は清少納言によって書かれた「随筆」と呼ばれる種類の作品であるが、これと同じ種類の作品は、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。

- ア おくのほそ道
 イ 徒然草
 ウ 平家物語
 エ 万葉集

4

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

千利休の朝顔をめぐるエピソードは、比較的よく知られた話であろう。利休は珍しい種類の朝顔を栽培して評判を呼んでいた。その評判を聞いた秀吉が実際に朝顔を見てみたいと望んだので、利休は秀吉を自分の邸に招く。ところがその当日の朝、利休は庭に咲いていた朝顔の花を全部摘み取らせてしまった。やって来た秀吉は、期待を裏切られて、当然不機嫌になる。しかしかたわらの茶室に招き入れられると、その床の間に一輪、見事な朝顔が活けられていた。それを見て秀吉は大いに満足したという。

このエピソードに、美に対する利休の考えがよく示されている。庭一面に咲いた朝顔の花も、むろんそれなりに魅力的な光景であろう。しかし利休は、その美しさを敢えて犠牲にして、床の間のただ一点にすべてを凝縮させた。一輪の花の美しさを際立たせるためには、それ以外の花の存在は不要である。いやそれどころか邪魔になるとさえ言えるかもしれない。邪魔なもの、余計なものを切り捨てるところに利休の美は成立する。

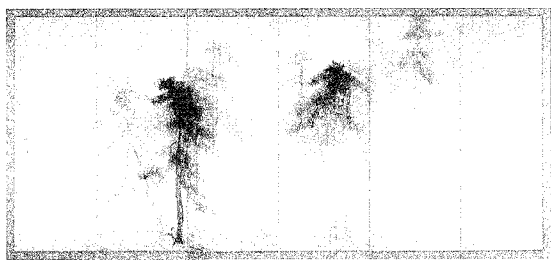
だが庭の花を摘み取らせたことの意味は、余計なものの排除という点にだけ尽きるものではない。花のない庭というのは、それ自体美の世界を構成する重要な役割を持っている。期待に満ちてやって来た秀吉は、一輪の花もない庭を見て失望し、不満を覚えたであろう。茶室に入ったときも、その不満は続いてははずである。そのような状態で床の間の花と対面したとすれば、何もなしに直接花と向き合ったときと較べて、不満があつた分だけ驚きは大きく、印象もそれだけ強烈なものとなつたであろう。利休はそこまで計算していたのではなかつたろうか。

つまり床の間の花は、庭の花の不在によつていつそう引き立てられる。このような美の世界を仮りに一幅の絵画に仕立てるとすれば、画面の中央に花を置くだけでは不十分であり、一方に花が、そして他方に何も無い空間が広がるという構図になるであろう。日本の水墨画における余白と呼ばれるものが、まさしくそのような空間である。この「余白」という言葉は、英語やフランス語には訳しにくい。西洋の油絵では、風景画でも静物画でも、画面は隅々まで塗られるのが本来であり、何も描かれていない部分があるとすれば、それは単に未完成に過ぎないからである。だが例えば長谷川等伯の《松林図》においては、強い筆づかいの濃墨の松や霧のなかに消えて行くような薄墨の松がつくり出す樹木の群のあいだに、何も無い空間が置かれることによつて画面に神秘的な奥行きが生じ、空間自体にも幽遠な雰囲気漂う。また、大徳寺の方丈に探幽が描いた《山水図》では、何も無い広々とした余白の空間が、あたかも画面の主役であるかのように見る者に迫ってくる。

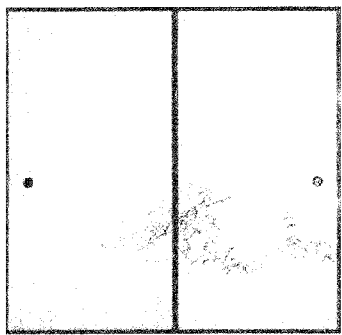
もともと余計なもの、二義的なものを一切排除するというのは、日本の美意識の一つの大きな特色である。京都御所の紫宸殿の庭は、西欧の宮殿庭園に見られるような花壇や彫像や噴水はまったくなく、ただ一面に白い砂礫を敷きつめただけの清浄な空間であり、あらゆる装飾や彩色を拒否した簡素な白木造りの伊勢神宮は、今日に至るまでもとのままのかたちで受け継がれ、生き続けている。伊勢神宮の式年造替(遷宮)が始まったのは紀元七世紀後半のこととされており、建物の原型もほぼその頃に成立したと考えられているが、当時日本にはすでに、大陸からもたらされた仏教が一世紀以上の歴史を経て定着しており、それにともなつて「青丹よし奈良の都」と言われる通り、多彩な仏教寺院建築も、奈良をはじめ日本の各地に建てられていた。仏教寺院の場合、建築工法も、柱を礎石の上に置き、屋根は瓦葺きという進んだやり方で、掘立柱、萱葺きの伊勢神宮より、保存性もはるかに高い(それゆえに、伊勢神宮は二十年ごとの建て替えが必要となる)。伊勢神宮でも、周囲にめぐらされた高欄の部分などに仏教建築の影響が認められるから、その造営にあつた工匠たちが大陸渡来の新技術を知らなかったわけではない。だがそれにもかかわらず、日本人は敢えて古い、簡素な様式を選び取り、しかもそれを千三百年以上にわたつて保ち続けた。そこには、余計なものを拒否するという美意識——信仰と深く結びついた美意識——が一貫して流れていると言つてよいであろう。

(出典 高階秀爾「日本人にとって美しさとは何か」)

(注) 方丈——寺院の中で、住職の居住する場所。
紫宸殿——天皇が儀式や政務を行う場所。
式年造替——神社を一定年限ごとに建て替えること。
掘立柱——直接、地面に埋められた柱。
高欄——宮殿、社寺などの端の手すり。



長谷川等伯《松林図》(部分)
安土桃山時代、東京国立博物館蔵



狩野探幽《山水図》(部分)
江戸時代、大徳寺蔵

- ① 部分②、④、⑤の漢字の読みを書きなさい。
- ② 「招く」と活用の種類が同じ動詞は、ア～オのうちではどれですか。当てはまるものをすべて答えなさい。
ア 来る イ 似る ウ 折る エ する オ 配る
- ③ 「期待」とあるが、ここでの「期待」が表す内容について説明したものとして最も適当なのは、ア～エのうちではどれですか。一つ答えなさい。
ア 朝顔を手に入れること イ 朝顔を摘み取らせること
ウ 利休の茶室を見ること エ 評判の朝顔を見ること
- ④ 「花のない庭……持つている」とあるが、ここで述べられている「重要な役割」の具体的な内容について、文章中のことばを使って三十文字以内で書きなさい。
- ⑤ 「あらゆる……生き続けている」とあるが、伊勢神宮の建築様式に関する筆者の考えを説明した次の文の□□□□に入れるのに適当なことばを、文章中から十六文字で抜き出して書きなさい。
今日まで伊勢神宮で簡素な様式が受け継がれていることの根底には、□□□□が存在している。
- ⑥ あなたは国語の授業でこの文章を学習して、文章中の□□□□の部分について、先生から次のような説明を受けた。これを読んで、(1)、(2)に答えなさい。

この□□□□の部分では、先に「結論・意見」を示してから「理由・根拠」が述べられていますが、次のように変えると、「理由・根拠」のあとに「結論・意見」を述べることもできます。

【板書】

西洋の油絵では、何も描かれていない部分があるとその作品は□□□□だと捉えられる。だから、日本の水墨画における「余白」という言葉を英語やフランス語に訳すのは難しい。

板書のように、先に「理由・根拠」を示して「結論・意見」をあとで述べる場合は、「だから」という接続語を用いることもできます。このように、接続語を用いるなどして、「結論・意見」とそれを支える「理由・根拠」を意識しながら文章を構成することで、論理的に意見を主張できます。

- (1) □□□□に入れるのに適当なことばを、□□□□の部分から抜き出して書きなさい。
- (2) 先生の説明を踏まえて、「私の好きな季節」というテーマで、条件に従って六十文字以上八十文字以内で書きなさい。

条件 1 二文で書き、文の接続に「だから」を用いること。
2 あなたの好きな季節と、あなたがそう考える理由や根拠を明確にして書くこと。

